



目次

- 廣告
- 生徒募集
- 論説及研究
- 愛林思想の鼓吹
- 森林労働
- 隨筆
- あくまで眞直に
- さる
- 美しき樹木
- 文苑
- 林業いろはかるた
- 雜報
- 學校たより
- 其他

大正九年一月二十五日 第百廿三號 明治四十四年六月十四日 第三種郵便物認可

廣告

生徒募集廣告

來る四月本校第一學年に入學せしむ
へき生徒約九十名を募集す
大正九年一月

長野縣立木曾山林學校

○入學手續概略

本校に入學せしむとするものは入學願書に履歷書、戶籍謄本(及非抄本)及身体検査書を添へ來る二月二十五日迄に當校へ差出すへし其の様式左の如し

入學願書 (用紙美濃紙)

御校第一學年へ入學志願に付御許可被成下度履歷書身体検査書及戶籍謄本相添へ此段願上候也

何(府)縣何郡(市)何(町)村何番地
居住(寄留なれば寄留地をも記入)
誰子(弟)等

職業

何(府)縣(華士族)平民
年月日 入學志願者 何某
全上
全上

右父兄、後見人 何某
長野縣立木曾山林學校校長 氏名殿

履歷書

本籍 何(府)縣何郡(市)何(町)村何番地
寄留地 何(府)縣何郡(市)何(町)村何番地
族稱 誰子(弟) (又は戶主)
何 某
生年月日

一、何年何月何學校何科何學年の教科を修業又は卒業(必ず證書の寫を添付すること)
一、何年何月より何年何月迄何處何某に就きて何學修業書

一、何年何月何處に於て何の件に付賞若は罰を受く
右の通相違無之候也
年 月 日

身体検査書

本籍 何(府)縣何郡(市)何(町)村何番地
寄留地 何(府)縣何郡(市)何(町)村何番地
何(府)縣 族稱
何 某
生年月日

体格 胸圍 身長 體重
色盲 中心視力 聽力
皮膚 呼吸器 眼病
一、既現在の疾病又は畸形
一、四肢運動障害の有無
右検査候處相違無之候也
年月日検査 住所
何學校醫又は醫師 氏名殿

注意尙詳細は當校へ承合すへし

會友諸君に謹告す

嚴冬之候諸君益々御清祥之段奉賀候
陳者時世の進展に伴ひ當本會山林學校も擴
張すると相成り本年は一年級に一學級を
増し定員を増加募集すること相成候に
就ては此の際諸君より多數の優良なる入學
志願者を御推挙に預り度伏して願上候

論説及研究

愛林思想の鼓吹

森林は人類最初の聖殿であつた、此の森林
の中で眞の神に接し其の言葉を聴き其の脚
下にひれ伏して祈禱を捧げたものである、
森嚴なる自然に觸れては祈らざらんとする
も能はないのである、假令惡念の生ずると
あるも沈黙の裡に自己の周旋に行はる、永
遠の神の事業一創造の大奇蹟一を思ふては
只管に畏怖して其の徳性を恢復せざるを得
なかつたのである、然るに今日は如何であ
らうか只々宏大なる殿堂を建て、徒に形式
的なる禮拜讚美を爲す者のみ多く眞に神を
敬するの誠意ある者果して幾何あらう、眞
の敬神は道徳の根本である、道徳の根本思
想が既に已に如此である況や他の枝葉に至
つては言語の限ではない
科學の進歩によつて無線電話は出来、精巧
なる望遠鏡は製せられ、飛行器は發明せら
れた、然し之等によつて神の言葉を聴くこ
とや神の姿を望むとや神の許に到達するこ

とは出来ぬ、人類は神から遠かつて了つた
のである
人類は知識の進歩と共に道徳も其れに連れ
て進まなければならなかつたのである、然
るに單に知識の増進のみを以て文明と考へ
之を偏重した結果道徳は等閑に附せられ却
て退歩して終つた、現代文明は其のコース
を誤つて居る
其のコースの誤れを所と文明なるものに心
醉せる人々は愚にも人間の知力を以て自然
に打ち勝つことが出来ると思つて居る、單
に物質上から考へたら或は左様かも知れぬ
然し精神的方面から見たら人はたへず自然
の絶大なる影響を受けて居ることを否むて
とは出来ない
人は其の利益の爲に美なる自然を破壊する
ことは出来る、然り人は物質的に自然に打
ち勝つことが出来る、然し破壊せられて醜
化する自然が人に與へる不良なる感化を免
る、ことは出来ぬ、山紫水明の地には高潔
な人が生ずる、偉大なる人物は美しい大自
然の徳から生れる
人は愚にも美はしい自然を破壊して其れに
よつて受ける惡感化のことに氣がつかぬ、
斯くて人は父より子に子より孫に漸次其の
惡性を増加して今日に至つたのである
人智を何處までも進歩する道徳は地を拂つ
てしまふ其の曉には如何なるであらう
人類は其の進歩した智識の爲に滅亡すべき
運命に遭遇せなければならぬ
戦後世界改造の聲は轟しく喧傳せられて居
る、此の改造の第一着手としては先づ滅亡

すべき運命から人類を救ひ出すことである
世界人類の救済といへば餘りに問題が大
きい様であるが其一部分否大部分は我々に
出来ることである、又我々が是非共なきに
なければならぬ義務である
秀麗雄大な自然は人々に好感化を與へて
人を向上せしむることは争はれない事實で
ある、苟して自然美の外套をなすものは森
林である、試みに思へ自然界から森林を取り
去つたら何が残れる
自然美の外套であり自然美の大部分をなす
所の森林の造成撫育及之が指導の任に當る
ものは我々である、我々が經營指導宜しき
を得て現在する森林は愈々扶育し既に破壊
せられしものは補修して、麗はしき自然の
外套を仕立てることが出来たら其れがどれ
丈人の心に良影響を與へるか僕は百千の教
師が口からあわをどばして修身の講義をす
るよりも更に大なる更に力強い點があらう
と信ずる
諸君幸に僕の意を諒とせられ世界改造の土
臺として人に愛林思想の宣傳につとめられ
以て大自然の美套造盡成力せられんことを
希望す
茲に筆をかくに當りブライアレットの侍の一
部を誦する
旅人よ、汝若し
世の罪業慘苦に充つるを知り
其の悲哀、積罪、煩勞多きを看て
心懺するところあらば

第三節 勞銀の變動

勞働者に必要欠くべからざる生計資料が勞
銀の決定事由を構成する主なるものなる以
上は、彼等の維持費、即生活費に影響を及
ぼす萬般の事項が自ら勞銀の變動を招致す
る蓋し、當然のことにして今これが變動
を來す原因を尋ねれば次の如し

(1) 氣候の關係

暖寒兩地の勞働者の生活状態を比較せば
寒冷の地は暖を乞ふ爲めに衣服薪炭等多
くを要し、且住居の如きも暖地の其より
は多くの建設費及維持費を要すべし、依
て寒地の勞働者は暖地の者より勞銀高か
るべき筈なり

(2) 國民經濟の程度

勞働者の風俗習慣即ち一般に生計の維持
及子女の教育に必要な諸費用は國民經
濟の程度如何に依るものにして、經濟の

程度進歩せば勞働者の物質的並に精神的
欲望の増進するは當然にして従て勞銀に
變動を來すべきものなり

(3) 穀物の價格

穀類は國民大部分の食料なれば此價格の
變動殊に米價の變動が勞働賃銀に變動を
及ぼすは言を俟たず

(4) 資本の増加

此の資本の増加は勞銀に對して二つの相
反する作用を有するが如し、即
(イ) 資本の増加によりて諸事業擴張し勞
働者の需要を増加し勞銀を騰貴せしむ
(ロ) 資本増加の爲事業上有利なる器具器
械を増加し勞働の需要を減し賃銀を低
落せしむ
然れ共資本の増加殊に(ロ)の器具器械の
購入による變動の如きは林業に於てはあ
まり大なる關係なきが如し何んとなれば
元來林業は器械を利用すること少なく又
合理なる經營にありては施業案なるもの
定まり濫に事業の擴張を許さざればなり
以上勞銀變動の原因を案するに今回の時
局の影響は事實に於て此れが變動を證明
せるもの、如し

今青森大林區に於て戦前並に現在(大正七

年末)に對する勞銀變化の状態を來せば次
表の如し

青森管内勞働賃金變化狀態

事業種別	戦前	大正六年	大正七年	備考
林業	0.700	0.750	0.750	
伐木	0.400	0.450	0.450	
巡守	0.400	0.450	0.450	
林野	0.400	0.450	0.450	
定林	0.400	0.450	0.450	
林野	0.400	0.450	0.450	
頭人	0.500	0.550	0.550	
人夫(男)	0.300	0.350	0.350	
人夫(女)	0.200	0.250	0.250	
造林(男)	0.400	0.450	0.450	
造林(女)	0.300	0.350	0.350	
木挽	0.500	0.550	0.550	
石工	1.000	1.100	1.100	
大工	0.750	0.800	0.800	
人夫	0.450	0.500	0.500	
平均	1.00	1.17	1.17	戦前を100とする

尙管内に於ける勞銀變化の状態を詳にせん
が爲に土木事業に於ける縣別調査せるもの
を示せば次表の如し

備人別	宮城	岩手	青森	平均
大正三年	0.800	0.800	0.800	0.800
大正四年	0.850	0.850	0.850	0.850
大正五年	0.900	0.900	0.900	0.900
大正六年	0.950	0.950	0.950	0.950
大正七年	1.000	1.000	1.000	1.000
大正八年	1.050	1.050	1.050	1.050
大正九年	1.100	1.100	1.100	1.100

隨筆

飽くまで眞直に

竹川生

多忙な大正八年も過ぎ去つて九年を迎ふることとなつた、此の九年の初めに當つて誰も多少の感慨があるだらうと思ふ、先づ氣に懸ることは社會の變化が何處まで進んであらうか、良く進むであらうか、或は間違つた方面に進みはせぬか、之に對する吾人の覺悟や如何、學生は學生として、紳士は紳士として、其他立場々々に相應して各覺悟を要する、或は自覺を要するとも自信を要するとも云ひ得る、此の覺悟が無いならば恰も根の無い浮き卵が浪の間に動くが如く、心が動揺して自個といふものを立て通すことは覺束ない、大正九年といふ年も孰れ並々の年ではない、依て自個の確立を一層必要とする、新聞雜誌を見ても改造とか、創造とか言ふことが、頻りに絶叫せられて居る、昨年は解放といふ言葉が可なり多く叫ばれたが、一年過れば他の言葉でなければ世間が歓迎せぬから自然と新しいことが流行して来る、併し孰れにしても大差なしで、要するに或る一種の株から段々芽が出るのであつて、其元は變りはないと思つて差支はない、而して其元株といふのを能く研究せねば、へまを演ずること

ことになるから用心第一である人間は不變不動で暮らすことは到底出来ぬ性分である、新規を追ふて止まる所を知らぬ、是は固より悪いことでない所か、非常に結構である、之が元株の性質である筈だ併し陽氣の勢で時々妙々變つた芽を吹くところがある、昨今の陽氣では餘程注意を要する、變な芽を潰さねばならぬ、併し其の萌芽を識別する眼が悪くなつては駄目であるから、眼識を正しくすることを最も注意せねばならぬ、其の爲めには一定の尺度を要する、其の尺度とは外でもない、歴史である、歴史の裡に流れて居る活きた精神である、之を顧み彼を視て寸退尺進せば、社會に貢献する上に於て、社會の波動を受け凌ぐ上に於て、大なる便宜があるであらうと思はるは是れか飽くまで眞直に進行する途であると思ふ

居るといふ事になれて居る、吾國も茲に見る所あつて、九年度よりは公有林の造林費を澤山に計上して、大に造林を實行せんとしつゝ、ある、諸君の奮闘を要する舞臺が盛大となりつゝ、あるのである、元來技術家を誠に神聖なものである、眞理に従ふもの合を應用するもの、天然の法理に従ふもの天帝に最も忠實なるもの、是れ技術家の本領である、天然を相手とするには些の曲つた事を許さぬ、少しの不合理をも許さぬ、唯眞直に進みよ外に方法はない、大正九年の社會の出来事は如何であらうと、林業家の進むべき途は一路明白である、少しの迷路もない、飽くまで眞直に進むのみである、技術家たる者は誠に仕合ではないか

夫君何と思つたかエテガク町ですれど問ひかへした、いやサルガク町だと念を押すといへエテガク町よがすと云つてひき出した、あとで友人からさいたら東京ではサルといふ語をきらつてエテと反語にして云ふんだとのこと、それで始めて車夫君の言ひ分がわかつた

をより杜に夢笠の女舞をならふ盤に杉立のくるしさも綱に蜘蛛のあふなきもおのが心のわざならぬかは、しかし餅屋の見世に立ちて猿持替の名に立てられ楊枝の看板にあふびきて往來の人に笑はれんよりはつねに庚申のかたはらに侍りてみざるきかざるは勝手次第にて言はざるは伊川の實用ながら言うてあそぶべく狂うてこぼさぬ俳諧の自喜を知れとなり(僧一空 猿篋)

見ざるにまざることはあらしなきればこそ望もおこれ腹も立て
きかざるぞげにまざるなりける
心にはなにのこを思ふとも
人のあしきを云はざるぞよし
みずきかす言はざる三つのさるよりも
思はざるこそまざるなりけれ

○昨年あたりから暴威を振った舶来の流行感即ちスベイン風、世界風などの名稱は皆知つて居るが和製のごう申風といふ名は知つて居る人が少からう、ごう申風とはごう申のある日引く風でよくかゝり易いものである御用心

○ごう申の名稱の出た序にも一つごうしん安といふのがある、これは相場のことを云ふのでごうしんの日には諸物價が下落するとの俗説である

○桃太郎の鬼が鳥遠征の時は猿と犬とは仲のよい御伴、猿芝居では武士と馬といふ格であるが其他は何時何物も仲のよい代表者である、其も其管方方が去るといへば一方は往歳と云ふ

○柿の種子事件以來蟹ども仲が面白からず山の小川の邊で會はうものなら真赤な顔を蒼くして木へ逃げ登るとのこと、い、かけんに平和條約でも締結してはいかに

敗したるに云ふ
が梢を渡る様
得意になすこと巧なるに云ふ
猿が人參を貰つた様
貴重なる物を得ても用法を知らざるを云ふ
猿が佛を笑ふ
無智の者が智者の真意を測る能はずして却て笑ふを云ふ
猿が筒を折つた様
自分の爲せることを自分で驚くこと
猿と鶴との交を絶つ
山人が世に出づるを云ふ
猿の一とび
相撲の手の一つ
猿の狂言見ぬからをかし
言行の不一致なること、上と心との一致せぬことをあざけりて 云ふ
猿に冠、猿に烏帽子
外観丈にて眞似な貴人を笑ふ語
猿に木鼻を教ふる様
釋迦に經孔子に悟道の類なり
猿にも衣裳
外観をかざれば立派に見ゆる、意
猿に衣をさせる
物を誤りたることを云ふ
猿の盛乱
顔を赤くして苦しむこと
猿の木上り

巧なること、過誤なきこと
猿の牙
米の白い形容
猿の尻笑、猿の面笑
自ら欠点ありながら他人を笑ふ意
猿の水練魚の木上り
見當違ふことをすること
猿の空風
執務する如く見せかけて實際にせざるを云ふ
猿の花見
花見に出で酔顔の赤きを笑ふ
猿の人真似
他人の真似をしる者をあざけるに用ふ
猿の餅かぶ様
右から左といふ意
猿の傳
よく子をなかす守をいふ
猿も木から落つ
弘法も筆の誤の類
申西あれて成あかり
申の日酉の日に天氣あれて戌の日に晴るといふ意
以上
九、一、三、
N

美はしき樹木 (二)

百年許前ギルピンは其の著書「森林風景」中に土地より生じた物の中で最も偉大な最も美麗なものは樹木であると云つて居る、樹木はこれとして美しくないものはない、孤立して居る場合には各種特有の性状即ち樹相を呈して居る、種類によりては壯麗優雅にして多くの美術家が様々に描寫の的となしギリシヤ人やローマ人に到りては遂に之を神として祀るに至つた、幹より葉に到る迄總てが御互によく調和を保つて完全なる形態をなして居る、樹木は美の方面と同時に力の象徴として引合に出されて居る、頑丈な樹は何處迄も抵抗して頑張る好例で柳は風になよ／＼して居ながらも決して折れないことを示す適例である、そして何れも夫々狂暴なる颶風に對して決して打ち挫かれないで確乎とつて居る、其處に云ふべからざるものがある、瘤のある樹や朽ちて穴のあいた木でさへも尚詩的な趣味を風景に添へて居るではないか

春が来て樹木は新しい衣を纏ふ様になると吾々は萌芽の美を賞することが出来る、苞が破れて内から鮮緑の若葉が現はれて来るのである、又普通の榊樹や山楡の芽が苞から出る時は實に美はしい色を呈する、山毛櫨の若葉は出る時白い絹糸の様な物毛で被れ落葉松の葉東には奇麗な赤い芽夷がついて居る、尚吾々は柳やボナラや七果樹や其の他冬の林木に就て夫々其の美しい点を擧げることか出来る、葉の美しいのは春に限つたことではないが春先には花も未だつかず且其色が花にもまさつて美しいものである

秋潤落するに先つて葉の色彩は美はしい絶頂に達し其の間に色ついた果實が點在して居る、朝日夕日に映ゆる紅葉をあかす眺むることの出来るのは此の時である、此の季節にも春と全様に各々其の特有のすがたで人目を引いて居る、葉が褐色に枯れて尚暫くの間附暮して居る樹は矢張り其の頑固な性質を示して居る

文苑

林業いろは歌留多

大正九年正月 珍竹庵主人案
も枝葉の茂つた樹下に恰もグイルギルの詩
にある牧羊者の如く身を横へて樂しむので
ある
い 勇んで植ふる寶の木
ろ 論より證據山の價値
は 林無ければ山も病む
に 日本の命森にあり
ほ 骨出る山の國亡ぶ
へ 平時戦時も木の同意
ど 時をたかはす樹を移せ
ら 治水の本は山にあり
り 利益の多少も山次第
ぬ 抜き出た森に神宿る
る 累伐榮ゆる山の恩
を 教へと山は盡し方
わ 若木の手入老の幸
か 金になる木も三葉より
よ 世の文明に山廢ぶ
た 竹の情に木の恵
れ 禮儀をり、扁柏の香
る 疎伐の業は人委せ
つ 盡さぬ寶山が産む
ね 寝せ込大事や茸造り
な 苗木の良恩育て方
ら 濫伐の果地獄沙汰

棟木は山の秀材に
生れ落つるや木の盟
遺産は美事山林に
野火は恐し煙草の火
落葉で育つ林の木
國の盛衰山語る
山の恵に世の榮わ
蒔た木の實に黄金なる
健康の神木に宿る
古里偲ふ山木立
木の葉潜りて淀の河
枝葉成りて山も肥え
出稼するなら山稼
荒い峯筋木も堅い
材の適否も用ひ方
記念の植樹老の笑
油断大敵虫の害
瞑目しても木の出来
源繁末く清し
種子の素因と山の出来
遠慮の業に山榮ゆ
火の老用心山の火事
紅葉の錦秋の山
清健の氣や山育ち
水源涸れ田畑病少
雲煙たびく峯の森

雑報
學校たより
○四方拜賀式 一月二日午前九時四方拜賀式を講堂に舉行す

○軍事講演 二月十六日新開村在郷軍人分會の會合を本校講堂に催し飯田聯隊區司令官半部大佐の講演ありたり
○始業式 一月二十一日午前九時始業式を講堂に舉行す

會員異動
○伊藤近良者 今回高知縣窪川小林區署へ就職せらる

林友代領收報告
金參拾六錢 金田美行君
金壹圓 原正造君
金壹圓 岡田彌兵衛君
金壹圓五十錢 山崎多門君
金壹圓 村松一清君

七宮先生謝恩金領收報告
金壹圓 金田美行君
金貳圓 星加晴雄君
金貳圓 丸山嘉一郎君
金壹圓五十錢 坂本光太郎君
金壹圓 山本茂君
金壹圓 梅村計介君
金壹圓 藤野秀宗君
金壹圓 佐塚甲子君
金壹圓 星加正雄君
金貳圓 都竹武次郎君
金貳圓 青木忠太郎君
金貳圓 坂卷利一君

福川正三君
原川只一君
松川久吉君
米山芳郎君
小岩井茂樹君
原正造君
吉川眞夫君
和田實也君
横井正守君
羽田龍尾君
木下武夫君
瀧澤銀次郎君
下平三雄君
山村次一君
原七郎君
山羽根安治君
細江七兵衛君
塚田大君
佐藤光造君
上田彌太郎君
池田福雄君
佐藤誠一君
伊東兵太郎君
松澤莊太郎君
加藤清一君
松尾廣次君
塩川金次君
箕部覺明君
赤原智高君

金五圓 大久保幸福君
金參圓 柳澤得衛君
金五圓 白木老雄君
金貳圓 平田美則君
金貳圓 小原靜雄君
金貳圓 佐藤一郎君
金貳圓 不修久君
金貳圓 山崎多門君
金貳圓 小林盛大君
金貳圓 中畑佐耕君
金貳圓 村松一清君
金壹圓 各務傳六君
金拾圓 唐澤繁夫君
金貳圓 柘植五郎君
金貳圓 等々力官一君
金貳圓 岡田猛君
金貳圓 藤原幾喜君
金貳圓 今井眞二君
金貳圓 石坂季治君
金貳圓 喜多村弘君

謝恩金募集期間延長廣告

嚴冬之候各位益御清適之段奉賀候
陳者七宮先生の謝恩金募集に就ては大方の御賛同を得たるを以て豫定の如く其後多數の御申込有之候に付此際募集期間を來る十二月末日迄延長し候に付御賛同を得ざる諸君は奮つて御賛同被下度候
尙左記御諒知被下度候

大正九年一月 校友會
卒業生各位
記
一、御送金は振替口座東京一七六〇〇番木曾山林學校宛又は郵便爲替にて山林學校内中村三郎へ宛て願候
一、領收證は一々不差出誌上の廣告を以て之に代ふ

謹賀新年
併て新年勿々賀狀を賜りたる諸兄に對し茲に厚く御禮申上候
大正九年一月
長野縣立木曾山林學校 校友會

學校又は校友會宛年賀狀を辱うしたる各位の芳名を右に列記し茲に謝意を表す
上伊那農業學校職員御一同
愛知縣立農林學校職員御一同
上田高等女學校職員御一同
飯田高等女學校職員御一同
下高井郡立農林學校職員御一同
上伊那郡立農林學校職員御一同
上高井郡立農林學校職員御一同
下高井郡立農商學校職員御一同
埴科農蠶學校職員御一同
帝室林野管理局札幌支局職員御一同

帝室林野管理局王瀧出張所職員御一同
長野縣農商農耕地整理係御一同
長野縣立農事試驗場職員御一同
長野縣農會職員御一同
西筑摩郡役所職員御一同
新開村役場御中
三吉 米熊殿 松下 金六殿 稻垣潤太郎殿
七宮 純雄殿 太田 由市殿 米山太郎吉殿
松原 大造殿 河野 長六殿 福澤 桃十殿
新家 園面殿 安藤 時雄殿 大場 慎六殿
林 重郎殿 福山 也殿 大城 朝路殿
手塚 光雄殿 成瀬 義郎殿 糸魚川良二殿
稻葉 增吉殿 井原 邦雄殿 坂本光太郎殿
小林 右内殿 松澤 敏郎殿 井上新次郎殿
田中 吟重殿 輪湖 正由殿 野見山定雄殿
岡戸 廣治殿 深美 利一殿 内山伊那登殿
奥村 利一殿 下平 佐門殿 内田新之助殿
岩井 洋治殿 星加 晴雄殿 瀧澤銀治殿
古根 勳殿 篠原 爲一殿 青戸爲九郎殿
平田 美則殿 篠原 將英殿 大木多喜雄殿
原 四郎殿 中畑 利一殿 原田久保作殿
小谷 益實殿 坂卷 利一殿 原田久保作殿
中川 源太殿 今井 眞二殿 久保田吾良殿
山本 茂殿 篠原 忠治殿 瀧澤銀治殿
原 正次殿 篠原 武重殿 岡田彌兵衛殿
遠藤 宗作殿 藤卷 壽一殿 南清右衛門殿
森次 潔殿 古根 是殿 小池金三郎殿
不免 修六殿 藤田 要吾殿 柳澤正之進殿
大脇 又衛殿 高野 金作殿 長谷川義雄殿
宮澤 嘉二殿 種倉 隨藏殿 細窪友一郎殿

高橋	作次殿	原	貴一殿	平田久良治殿	小林	秀二殿	喜多村	弘殿	伊深幾太郎殿	兒野	惠榮殿	松上殿	伊東殿
小崎	次郎殿	宮田	實殿	代田文之助殿	石坂	季治殿	千村	吉雄殿	遠藤治一郎殿	萩原	正守殿	松上殿	伊東殿
梅村	計介殿	宮島	岩見殿	山下五郎記殿	近森	良材殿	三尾	實三殿	加藤源一郎殿	森井	惠榮殿	松上殿	伊東殿
德弘	正夫殿	佐藤	誠一殿	石曾根四郎殿	征矢	三郎殿	辻	敬二殿	大久保猪三郎殿	久保	正守殿	松上殿	伊東殿
森	正次殿	佐藤	甲子殿	肥田幸一郎殿	乙谷	耕吉殿	渡邊	知則殿	小瀧升太郎殿	安原	正守殿	松上殿	伊東殿
中田	惠令殿	中村	五郎殿	市岡淳一郎殿	原	七郎殿	山村	次一殿	小羽安次殿	合井	正守殿	松上殿	伊東殿
安藤	次郎殿	武久	貞一殿	加藤朝太郎殿	塚田	大殿	千村	善三殿	細江七兵衛殿	久保	正守殿	松上殿	伊東殿
矢島	穰殿	二木	季人殿	多田慶次郎殿	原川	只一殿	北川	信美殿	倉科浦一郎殿	橫井	正守殿	松上殿	伊東殿
小松	義三殿	木下	稔殿	竹内房太郎殿	加藤	七藏殿	岡山	益善殿	中澤浩一郎殿	山崎	正守殿	松上殿	伊東殿
由尾	忠助殿	丸山	岩吉殿	等々力官一殿	橫山	治人殿	中澤	揚殿	佐々木久一殿	關谷	正守殿	松上殿	伊東殿
鷹見	勤殿	小松	良輔殿	小藤作四郎殿	村松	一清殿	青木	忠太殿	月田喜代佐殿	山崎	正守殿	松上殿	伊東殿
千村	萬三殿	木村	康明殿	丸山嘉市郎殿	青木	重俊殿	今井	忠雄殿	上條嘉一郎殿	宮澤	正守殿	松上殿	伊東殿
小池	茂樹殿	水上	壯三殿	高柴真治郎殿	古畑	要司殿	小田	寶殿	後藤利太郎殿	日野	正守殿	松上殿	伊東殿
上條	芳郎殿	市川	潔殿	木村鐵次郎殿	吉澤	英雄殿	温井	誠一殿	加茂憲太郎殿	佐藤	正守殿	松上殿	伊東殿
日野	雅亮殿	高野	薰見殿	長谷部真一殿	遠澤	英一殿	中田	辰雄殿	福田友次郎殿	池田	正守殿	松上殿	伊東殿
福川	正三殿	市岡	新八殿	米久保春雄殿	小林	哲三殿	前野	秀宗殿	野知里慶助殿	原	正守殿	松上殿	伊東殿
丹澤	潔殿	米山	芳郎殿	小林英一郎殿	和田	實也殿	中田	穰殿	和田常次郎殿	今井	正守殿	松上殿	伊東殿
安井	元吉殿	古畑	七三殿	奧原吉右衛門殿	市川	豐二殿	後藤	豐吉殿	吉池三九郎殿	日野	正守殿	松上殿	伊東殿
伊藤	芳郎殿	原	正造殿	千村彌之助殿	赤羽	三郎殿	山下	藤一殿	長谷川房造殿	佐藤	正守殿	松上殿	伊東殿
北川	春殿	藤原	幾喜殿	坪倉藤三郎殿	菊池	貞次殿	倉澤	建雄殿	松館藤太郎殿	池田	正守殿	松上殿	伊東殿
原	彌藏殿	中村	豐治殿	恩田司馬之助殿	杉本	貢殿	甲田	林殿	山岸滋次郎殿	高田	正守殿	松上殿	伊東殿
瀬在	實殿	鳴澤	義郎殿	古畑今朝茂殿	森下	義郎殿	河島	憲一殿	廣瀬靜之進殿	志津	正守殿	松上殿	伊東殿
仲俣	伍市殿	加藤	清一殿	武居喜多郎殿	矢島	武六殿	松尾	廣次殿	宮森太一郎殿	上田	正守殿	松上殿	伊東殿
原田	義治殿	林	勸治殿	坂田勘太郎殿	小澤	安親殿	各務	傳六殿	伊藤正之助殿	宮澤	正守殿	松上殿	伊東殿
野村	光智殿	前田	正義殿	蜂須賀宮治郎殿	小林	政某殿	佐藤	光造殿	島田勘四郎殿	安藤	正守殿	松上殿	伊東殿
藏田	穀郎殿	中垣	英一殿	山下不二三殿	安藤	晏殿	柳澤	得衛殿	木村音次郎殿	柳澤	正守殿	松上殿	伊東殿
樋口	勵殿	水橋	要作殿	宇佐美周紫殿	唐澤	繁夫殿	仲谷	一馨殿	野尻萬次郎殿	柳澤	正守殿	松上殿	伊東殿
藏尾	眞殿	山崎	三男殿	宮崎惠喜太殿	川合	清行殿	今井	欽殿	奧村安太郎殿	堀內	正守殿	松上殿	伊東殿
草間	勝殿	松本	清太殿	小岩井茂樹殿	伊藤	喜代殿	村上	英勇殿	征矢野餘所夫殿	堀內	正守殿	松上殿	伊東殿
金井	澄水殿	丸山	久雄殿	勅使河原角藏殿	尾重	清殿	關	琴義殿	村上安太郎殿	堀內	正守殿	松上殿	伊東殿

大正九年一月廿三日印刷
長野縣西筑摩郡福嶋町四〇番地
長野縣松本市小柳町八十五番地